

大雪のワンダーランド

出張中のサラリーマンが、ホテルのフロント係に聞いた話。

札幌のまちには、冬の季節、どこからともなく現れる妖精たちがいる。
大雪の時だけに現れて、いろんないたずらをまちじゅうにしかけて、いつの間にやらいなくなる。
そういう妖精たちは「雪霊（ゆきだま）」と呼ばれていた。

でも最近、雪霊たちは言っていた。

「昔はね、こんなんじゃなかったんだけどね」

雪霊たちが言うには、年々温暖化がすすみ、札幌の雪がどんどん水分を含んで、
いたずらしにくい雪になっているらしい。

「つまらないね」 「そうだね」 「今年はゆきまつりもないんだってねえ・・・」

ゆきまつりがない本当の理由は、全く別のことだったのだが、雪霊たちにはもちろん、
そんなことわかっているはずもなかった。
そして、退屈した雪霊たちは、こっそりと良いことを思いついた。

その年の札幌は、60年ぶりと言われる大雪になった。
JRもバスも止まり、車道も歩道も誰も通れなくて、まちの中心部にも雪がうず高く積もり、視界を塞いだ。除雪も昼夜、
夜通しががんばったが、全くおいつかない日々が続いた。

そしてある朝、まちの中にはいろんな“あそびば”ができていた。

市内はまるで巨大なアスレチックジム。道が高くなったり低くなったりしていて、まちの人々は登ったり降りたり。階段のように登って行ったり、気づくと高台のようなところに立っていて、
道の途中で、いきなり落とし穴にはまることもあった。

狸小路の西3丁目～7丁目のあたりには大きなアイススケートリンクが出現して、
人々がツルツルと滑っていた。
「そろばん道」と呼ばれる、道がでこぼこしているところでは、バスとかタクシーが大きく揺れた。乗客は車体が揺れるたび、あちらにこちらに振り回されて、目的地につく頃にはクタクタになってしまった。

そして、まちのいろんなところに出現した、小さな小さな雪だるまたち。
赤レンガ、時計台、大通公園……。大中小、さまざまな大きさの雪だるまたちが、仲良く並んでいた。まちいく人々はみんなほっこりした顔をして、でも少し不思議そうに、その雪だるまたちを眺めていた。

「楽しかったね」 「よかったね」 「ゆきまつりだねえ」

まちの人たちのおどろきぶりとは裏腹に、雪霊たちは札幌のまちを眺めながら、とても満足そうだった。